

金森幸介 嘉門達夫

あるからコワイ! ビューティフル対決!!

2010年5月28日 @ James BLUES LAND

1st set

01. 「とりあえずジャンケンやって…」
02. **もう引き返せない** – 金森幸介
03. **いいこと** – 金森幸介
04. 「沈黙を恐れるな」
05. **誰がそこまでガンバレ!** 言うた – 嘉門達夫
06. **ええ奴やんか** – 嘉門達夫
07. 「1970年2月、ヤンタン今月の歌」
08. **水色のポエム**「～高校の文化祭みたいやなあ」 – 金森幸介 x 嘉門達夫
09. 「アホ賢い」
10. **静かな音楽になった** – 金森幸介
11. **たとえば** – 金森幸介
12. 「(オオナベさんへ) まだいけますか?」
13. **少年はいつの日もバカ!** – 嘉門達夫
14. 「今日は日本語で」
15. **小市民** – 嘉門達夫
16. 「(嘉門の歌を聴いて) カルチャーショックで…」
17. **美しい絵を描く人たちがいる** – 金森幸介

2nd set

01. 「横で見てたらアホみたいやで」
02. **遠くはなれて子守唄** – 金森幸介
03. **ふたりは** – 金森幸介
04. **新・鼻から牛乳～ライブバージョン～** – 嘉門達夫
05. 「大事にうたっていきたい歌」
06. **さくら咲く** – 嘉門達夫
07. 「これハモりたいって…」
08. **泌尿器科** – 金森幸介 x 嘉門達夫
09. 「出雲グループ?」
10. **何も無い俺だけど** – 金森幸介 x 嘉門達夫
11. **明るい未来** – 金森幸介 x 嘉門達夫
12. 「デビュー40周年…で、泌尿器科ってうたえるようになりました」
13. **悲しい日々** – 金森幸介 x 嘉門達夫

live recorded at James BLUES LAND / kobe, hyogo may 28 2010

vocals and guitar : KOSUKE KANAMORI

vocals and guitar : TATSUO KAMON

recorded : KAZUYA KITAMURA (Hoy-Hoy Records)

live sound : IZUMI MURAO

cover and inner photo : YOHSHI ITOKAWA

package design : Hoy-Hoy Records

visual design: YUKO TOMITA(Hoy-Hoy Records)

thanks: RYUICHI SUZUKI (James BLUES LAND), MIWAKO MOROTO, SETSUKO MURAO

dedicated to KAZUO WATANABE

「あの日、家を出るときからオレは『申し訳ない』という気持ちで、ライブの最中も、家に辿り着くまで、それから今もずっと『申し訳ない』と思いつづけている」

2010年。小さなオルフェとしてデビューし40年目を迎えた夏、金森幸介はそう回想した。あの日・・・2010年5月28日、神戸 James BLUES LAND で嘉門達夫とのライブ「あるからコワイ! ビューティフル対決!!」があった日のこと。彼は、デビューのきっかけを与えてくれた恩師・渡邊一雄を目前にうたっていた。

「ナベさんがオレのライブに来てなあ」と、いきなり電話口で話しはじめた。おそらくは2009年夏ごろのことだったと思う。

「オレが座っていたら『金森くん』ゆうて声かけてくるから、顔をあげたらナベさんやってん。もうビックリしてしもて・・・ホンマ、生きた心地せえへんかったわ」

金森幸介が本当に「生きた心地しなかった」ということはその口調ですぐにわかった。いつもなら電話での話しはじめは、たいていの場合、ギャグを2、3発応酬してから本題に入るのだが、その日の彼は「ナベさんが・・・」といきなり捲し立てた。

で、わたしはいつものペースを取り戻させようと「ナベさんって、だぁ～れ～?」という「ナベさんや。ナベさん。オオナベさんや。オマエ、ナベさんを知らんのか! ?」とさらに、火に油を注いでもったのだ。

ナベさん>オオナベさん>渡邊一雄とは、毎日放送のラジオ番組「ヤングタウン」の初代プロデューサー、生みの親であることが金森幸介の説明でわかった (lefty-hiro にいわせるとわたしはモグリ)。ラジオを聞かなかったわたしでもその番組名ぐらいは知っていた。小・中学生時代、ともだちがよくその番組のことを話していた。なにより小さなオルフェが同番組内にあったコーナー<今月の歌>で「みずいろのポエム」をうたっていたことを聞かされていたから。

「オレはなあ、ナベさんがおらんかったら今、うたっていないと思うわ」

孤高のシンガー金森幸介が感慨深げにつぶやいた。

「そうやなあ。おれへんかったら、ぼくもこんな文章書かんでもよかったのに・・・」

「アホか!」

小さなオルフェを結成させたのは渡邊一雄である。

「ヤングタウン」の<今月の歌>オーディションにやってきた金森幸介に、同じオーディションへやってきたシンガー高階真とデュオを組み、数曲、新しい作品を書くように命じたのが渡邊であった。金森幸介によると「小さなオルフェ」という名まえを考えてきたのは高階であったという。そして数日後、渡邊の前でふたりが演奏したのが「みずいろのポエム」で、その場で1970年2月の<今月の歌>(同年3月発売)に決定したのだった。余談だが、小さなオルフェとしての次作「ブルース田園」のB面「九月の風」も毎日放送「ヤング Oh ! Oh !」の<今月の歌>として取り上げられた。

金森幸介は<今月の歌>男か! ?

大学1年生だった金森幸介に渡邊は「夏休みを利用して東京へ行ってきたら」と助言。小さなオルフェはその後3ヶ月間、東京で活動することになった。天童よしみや千賀かほるらが所属する大手芸能プロダクションが彼らを「預かった」のだ。金森幸介はその会社に勤めるマネジャー宅がある六本木に居候した。そして毎日のようにテレビやラジオ、コンサートなどに出演した。

「千賀かほるのリサイタルでフルバンドをバックに『ヘイ・ジュード』もうたったでえ。『ヤング720』にも出演して、ザ・タイガースやゴールデンハーフトとも共演した。ゴールデンハーフトの森マリアのミニスカートを見ていたら、大石吾朗に『立ち位置が違う』と怒られた」

ワイドショー的な話を楽しそうに回想する金森幸介であったが、当時、真夜中に居候宅へ帰るとレッド・ツェッペリンの『II』をフルボリュームで聞きながら「なんでオレはこんなことしてんねん」と嘆いていたそうである。そして帰阪後、1年ほど小さなオルフェを解散。都会の村人、I.M.O. バンドと自身のキャリアを築くことになる。

2010年。50代最後の年を迎えた金森幸介は「今、『みずいろのポエム』を練習してんねん」とうつぶいた。

「ナベさんからのリクエストやねん。5月にやるライブにナベさんが来るねん。断られへんやろ? こればっかしは・・・」

金森幸介がおおよそ40年ぶりにうたう歌。現在、彼を追いかけるほとんどのファンはライブで演奏されるこの歌を聴いたことがないだろう。「それなら録音しに行く」とわたしは神戸へと向かった。

「変わる時代が変わらぬ男」と自らを形容する彼ではあるが、この日は確実に違った。オープニングの「もう引き返せない」から「いいこと」へとつづくメドレーは熟考された選曲だった。彼の「申し訳ない」という気持ちが伝わり、少し胸が熱くなった。2部の冒頭となった「遠く離れて子守唄」「ふたりは」も同様だ。<なにもかもがみんな一瞬のうちに失ってしまう世界にいる>という「美しい絵を描く人たちがいる」はニール・ヤングでいうと「ロッキン・イン・ザ・フリーワールド」(ちょっと飛躍し過ぎ?) 神戸でうたわれるこの歌はいつも素晴らしい。

あの日の金森幸介は小さなオルフェから<風のなかに立つ>シンガーになったとっているようにわたしには聞こえた。

で、ナベさん、申し訳ない・・・か?

北村和哉

夢の一夜

僕が金森幸介さんの存在を知ったのは、高校1年の時だった。

「ミュージックワンダーランド」というFM大阪の深夜番組で、喋り手は西岡たかしさんと幸介さん。シニカルかつ関西人独特の会話に惹き付けられ、西岡さん率いる「五つの赤い風船」の再結成ユニット「オリジナル・レッド・バルーンズ」のコンサートに出かけた。幸介さんはメインボーカルを担当すると共にソロで前座も務めていて、「バギーパンツの歌」などが印象的だった。幸介さんの「箱船は去って」と「少年」は、高校時代にもっとも聞いたアルバムになった。

その後、僕は鶴光師匠に入門。

なぜ鶴光師匠を選んだのか？師匠がヤングタウンのレギュラーメンバーだった事が大きい。中学、高校時代ずっとヤンタンを聞いていた僕は、その世界に憧れていた。音楽と笑いがセンス良く融合しているヤングタウンの住人になりたい！その思いが高じて、16歳の秋弟子入りを決行したのだった。

19歳の時、僕はチャンスをもたらった。新幹線の中で鶴光師匠とヤンタンのプロデューサーオオナベさんがバッテリー会「鶴ちゃん、誰か若手でイキのええのおらん？」と聞かれた師匠が、「ほなうちの学光と笑光（僕）見てもらえますか？」という事になり、僕は学光兄さんと2人で千里の毎日放送に赴いた。それぞれがスタジオに入り「キャンディーズとピンクレディー」について語った。イキオイ勝ちで僕が選ばれ、原田伸郎さんのサブで毎週喋るラッキーボーイになった。

思惑通りにヤンタンの仲間に入れた僕は、ヤンタンのには有望な若手、一方師匠のお家的には目障りな弟子となる。結果21歳の時に目出たく破門。番組も当然降板させられ、オオナベさんの進言でほとぼりが冷めるまで放浪の人となった。

バイト先のスキー場でギターを持って歌うスタイルをスタート。1年の放浪の旅から大阪に戻り、サザンオールスターズを抱えるプロダクション「アミューズ」の大里会長に拾われ、アミューズの大坂支社で有線まわりのバイトをしながら復帰の時期を待った。

桑田さんの前座をやらせてもらった事がキッカケで「嘉門」という名前をもらい、嘉門達夫として2年振りにヤンタンに復帰。そして「ヤンキーの兄ちゃんの歌」をリリースする。オオナベさんは、師匠がまだレギュラーの席に居るにもかかわらず、破門になった元弟子をラインナップに並べるという采配を振った。僕は2度目のチャンスをもたらった。

ライブ活動をする中、ギターテクニック向上の目的で、梅田のバナナホールに二階で開かれていた中川イサトさんのギター教室に通い始めた。イサトさんは五つの赤い風船のオリジナルメンバーであり、レッド・バルーンズにも参加。そんな繋がりでも何か一緒に出来ませんかねえ、と言う事になり、バナナホールでイサトさん、幸介さん、僕で「堂山町フォークジャンボリー」というライブが行われた。幸介さんと繋がった僕は、その後もライブのゲストに来てもらっ

たり、京都の円山音楽堂や服部緑地で共演させてもらった。それが80年代。

そして2009年。

オオナベさんから電話が入った。

「肺がんに頭で飛んであと1年くらいしか持たんらしい・・・オレも高倉になってもうた。」

僕は同じ経緯で2006年に亡くなった幼稚園からの同級生、「高倉」を面白おかしく送ったエピソードを「た・か・く・ら」という小説にして2007年に発表しており、読んでくれたオオナベさんは褒めてくれた。「オレも高倉になってもうた」とは「オレも楽しく送って！」というメッセージなのか？

そんな思いを抱きつつ、ポートアイランドの病院を見舞った。

この段階でオオナベさんはまだまだお元気。いろんな話に花が咲く中、なぜか幸介さんの話題になった。

「僕、高校の時、金森幸介さんが好きで、ようLP聞いてましたわ」と言うと、オオナベさんが「オレも好きやねん。去年見に行ったんや」と言うではないか。

時代はまた遡って、1970年。幸介さんは18歳。「ちいさなオルフェ」という2人組のユニットを組みヤンタン今月の歌を担当していた。この時「水色のポエム」という歌を歌った事がデビューのキッカケだ。僕より8年前に、幸介さんもオオナベさんからチャンスをもたらしていた。「昔から彼の歌はよかった。去年ネットで調べて神戸のライブハウスに見に行ってる。これがまたよかってん」とベッドでオオナベさんは嬉しそうに語る。

そのライブハウスが、『ジェームスブルースランド』。

実は見舞いの前日、僕は土佐堀にある写真家糸川耀史さんのスタジオに遊びに行き、「嘉門さん、神戸のジェームスブルースランドでやらはったらよろしいのに」と言われたところだった。糸川さんはこのライブハウスを気に入っておられ、幸介さんもたまに出演されているらしい。

そしてその夜偶然、僕は神戸にあるラジオ関西に出演する予定が入っていたのだ！糸川さんがそこまで言われるのなら一度見に行ってみようとジェームスを訪れたところだった。翌日の渡邊さんの見舞いに合わせて神戸に宿泊。そしてお見舞いという流れだ。

「ほなら僕と幸介さんでジェームスでライブが出来るか調整してみます」と言うと、ベッドのオオナベさんは「それは見たいなあ。ある意味アリスの再結成より見たい！」と言った。

糸川さんから幸介さんに連絡を取ってもらい、ジェームスのスケジュールを合わせて、2010年5月28日にライブが決まった。オオナベさんに伝えると以下のようなメールの返信があった。

そうか五月28日で決定か、そりゃ這ってでも伊かにか鳴るまい。楽しみや名匪。

難点はあそこが3階にあること。エレベーターがない事。

今から体力づくりに精を出さねば成るまい。

よく金森幸介がオケーしよたなあ、世紀の悪声と美声の対決である。内容で勝負であるな。胸が高鳴るよ。

彼は自ら歌をヒットさせるという意識を捨て去って40年世間におもねるという事を一切排除してひたすら信じる道を生きてきたからな。

ヤンタンで歌っている頃はもしかして一番の人気シンガーになる可能性を持っていたからな、彼の歌声には恋情にも似た思い入れを持っている。

歌手として真剣勝負を挑んでくれ。

なんじゃ？この妙な当て字のメール？

でも喜んではる！

そんな経緯で行われたライブの音源が、このCDです。

オオナベさんは2010年10月11日に逝去され、5月28日が最後の外出になりました。幸介さんと僕の歌と語りと共に、会場にいらっしやるオオナベさんの存在感も収録されています。

そんな不思議で貴重な、夢の一夜の様子をお楽しみ下さい。

嘉門達夫